

令和4（2022）年度
施設コンサルテーション事業
事業実施報告書

京都市発達障害者支援センター “かがやき”

はじめに

京都市発達障害者支援センター“かがやき”は、社会福祉法人京都総合福祉協会が京都市から委託を受けて平成17（2005）年に開所し、今に至ります。この間、関係各法に発達障害が位置付けられ、発達障害児者に対する施策が充実しつつあります。当センターでも、普及啓発事業やケースを通して各機関・事業所と連携しながら、正しい知識に基づく適切な支援を拡げることを目指してまいりました。

このような間接支援の一環として、当センターでは、地域の支援力の向上を目指し、平成30（2018）年度後期より、施設コンサルテーション事業を実施しています。当事業では、行動障害等の相談に対し、事業所への訪問・連絡等により、対象者のアセスメント・支援を事業所と協働で行い、問題行動の軽減や安定した施設生活につなげるサポートを行います。また、この事業を通して、事業所全体の発達障害のある利用者への特性理解や支援力の向上や、事業所職員がアセスメントから支援につなげるPLAN-DO-SEEのプロセスを行えるようになることを目指します。

当事業は、令和元（2019）年度までは試行期間として、法人内事業所を対象に実施し、事業のシステム作りに取り組んでまいりました。そして令和2（2020）年度より、京都市内の福祉サービス事業所に対して広く周知し、成人期の発達障害の方々の支援をされている施設を対象に、本格的に開始となりました。

本実践報告書は、事業開始3年目の取り組みをまとめたものです。この報告書が、発達障害の方々の支援をされている皆様にとって「理解や気づき」の基となり、「できる」力につながることを願っております。

末筆ではございますが、各実施事業所の皆様には施設コンサルテーション事業に対してご理解をいただき、熱い思いで取り組んでくださったことに感謝いたします。

令和6（2024）年3月
京都市発達障害者支援センター“かがやき”

令和4（2022）年度

施設コンサルテーション事業 実施事業所（50音順）

《研修コース》

- ・生活介護事業所ここいろ（特定非営利活動法人 ここみらい）*

《アセスメントコース》

- ・工房あすく（特定非営利活動法人 あすく）
- ・西寺育成苑デイサービス（社会福祉法人 京都育成の会）

* 事業所の希望により、かがやきホームページでは非公開

工房あすく（特定非営利活動法人あすく）

〒612-0008 京都市伏見区深草六反田町 4-9

TEL 075-551-4356 FAX 075-551-4356

E-mail koboask@gmail.com



◆ 実施コース **アセスメントコース**

◆ 実践報告

1. 事業所概要

サービスの種類：生活介護事業

定員 20名	現員 17名	1日平均利用者数 10.2名
利用者平均年齢 31.3歳	障害支援区分平均 5.9	

コンサルティング参加職員：4名（管理者1名、支援職員3名）

2. ケースの概要及び相談内容（対象者について、事業所の課題、職員の困りごとなど）

好ましくない行動について

- ・ Tさんは自閉スペクトラム症、重度知的障害の30代男性。
- ・ 場面によっては絵カードや発語で要求を伝えることができるが、うまく伝えられない時や不快な時に大声を出したり他害に及ぶこともある。
- ・ 多い時だと1日20回程トイレに行く。実際に排泄しているか確認することはしていないが、トイレに行くたびにトイレットペーパーの要求があり、その都度適量を手渡している（ペーパーを大量に流して詰まらせた事が度々あるため、常設できない）。ペーパーを渡さなければ指に便をつけて見せることがある。
- ・ タイマーでの移行がスムーズにできず、時間がかかったり大声を出すこともある。
- ・ 普段過ごしているフロアを出て、倉庫での活動へ移動する際に、玄関前で大声を出したり、スタッフに倉庫への同行を求めることがある。

かかわってほしい要求に対するスタッフの対応

物を取る、活動場所に移動する、作業の片付けなど、本来は自立して行うことができることを手伝ってほしいと要求することがある。できないから手伝ってほしいのではなく、スタッフにかかわってほしいという目的での要求の場合、それが常態化し、本来できることができなくなってしまうのではないかと懸念があった。スタッフとのかかわりが好きなTさんに対して、どのように要求に応じるべきか迷っていた。

スタッフの支援力向上

施設コンサルティング事業を通して皆で同じ学びを得ることで、チームとして問題解決のためにど

う取り組むべきかを知り、支援統一や支援に対する意識改革に繋げたい。

3. アセスメントから得られた情報と、それに基づく取り組み内容

アセスメントからわかったこと

強み・得意なこと	弱み・苦手なこと
<ul style="list-style-type: none"> ・ 規則的に配置することが得意 ・ スケジュール変更に対応できる ・ 経験したことを記憶する、覚えたことは忠実 ・ 繰り返し経験したことをパターンで覚える ・ スタッフとのかかわりが人的強化子になる ・ モデリングや見本提示により、作業工程が理解できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 拒否が苦手 ・ 受け身になりやすい ・ 要求がうまく伝わらないなど、イライラすると大声を出したり他害（頭突きなど）に及ぶ ・ 他の利用者さんの声が苦手
感覚の特性など	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 活動に使うもの（空き缶、ペットボトル）やコップなどを手に持ち、規則的な動きを繰り返す常同行動がある。 ・ 車の中など、自分のスペースが確保され、周りを見渡すことができる空間は落ち着いて過ごすことができる。 	

アセスメントにもとづく取り組みの計画、具体的内容

ターゲットとする行動	場面	方法、手順
① タイマーを使って、移行をスムーズに行う。	休憩が終わり、次の活動に移行する場面	スムーズに移行できない原因を知るため、「活動リズム表」を使って1日の記録をとる。
② トイレの際、ペーパーを何度も要求する。	トイレ使用时	<ul style="list-style-type: none"> ・ スケジュールの「てあらい」の活動のタイミングでトイレに行くことがパターンになっていたので、「てあらい」を最小限に減らす。 ・ 「てあらい」と「トイレ」のカードを新しく作成する。
③ カードを使ってスタッフとのかかわりを要求する。	休憩中	以前から使っていた「おはなしカード」を3枚→30枚に増やす。

① 「活動リズム表」からわかったこと

約3週間分の、来所時から帰宅されるまでの記録をとった。記録の際、Tさんが好きな活動や嫌いな刺激が少ない場面に着目することをアドバイスしていただいた。好ましくない行動にばかり注目しがちだが、穏やかに過ごすことができている場面はなぜそうなのかを考えることで、環境設定や活動を見直

すヒントになる。

記録から、Tさんは、スタッフとの関わりが十分にあることや創作時間は落ち着いて過ごしていることがわかった。そのため、レクリエーションとしてゲームや楽器を使った音楽遊びを新しく取り入れた。

② 「てあらい」と「トイレ」

「てあらい」と「トイレ」カードを新しく作り、「てあらい」は食事とおやつの前、「トイレ」は外出前や食事後にスケジュールに提示した。カードを作り変えることで、手洗いとトイレは別の活動であることを視覚的に示したが、Tさんの行動を変えることはできなかった。しかし、スケジュール上の「てあらい」が減ったことにより、1日にトイレに行く回数や、必要時以外に何度もペーパーを要求することは減少している。



③ 「おはなしカード」でのスタッフのかかわり

「おはなしカード」は、休憩時間にTさんが好きなロゴシートをスタッフと一緒に見るなどして過ごすことを要求できる絵カードである。「おはなしカード」は以前から使っていたが、1日3枚だったため、来所してすぐに使い切ってしまう有効に活用することができていなかった。

本人が求めている量に対応できるように、まずは1日に使い切ることができないくらいの枚数が必要とのアドバイスをいただき、30枚に増やした。

はじめのうちは必死に30枚使い切ろうとしているように見受けられ、イライラした様子もあったことから、スタッフとのかかわりを楽しんでいるようには思えない状態だったため、「おはなしカード」を30枚から20枚に減らした。20枚に減らして1週間ほど経過した頃から、次第にTさんのペースで使えるようになり、現在は1日平均15枚ほど使用している。



「おはなしカード」を使った
休憩時間の様子



「おはなしカード」を
使って、1枚につき3分
間スタッフと過ごすこ
とができる。

4. どのような変化が生まれたか（事業所職員の理解・気づき、対象者の変化など）

行動を理解する

施設コンサルテーション事業を受ける以前は、好ましくない行動にばかり注目し、なんとかその行動をやめさせることを考えて支援していた。コンサルテーションで、好ましくない行動はそれだけが急に起こるわけではなく、行動にはきっかけがあり、その行動により得ることのできた結果によっては、好ましくない行動が強化されるということを学び、Tさんの行動を改めて見直した。

Tさんの好ましくない行動は、スタッフとのかかわりを求める注目要求と考え、適切なコミュニケーションを増やす事で好ましくない行動が減るのではないかと考えた。例えば「ありがとう」「すごいね」などのプラスの声掛けや、支援者から見ると当たり前に感じる普通の状態を「してほしくないことをしていない時」＝「好ましい行動の時」と捉え、この普通の状態を適切に褒めるという点を特に念頭に置き、支援者の方から積極的に声をかけた。また、休憩時間にスタッフと関わることができる時間を保障するシステム（おはなしカード）を充実させた事により、少しずつ注目要求や介助要求が減少した。

Tさんの変化

今回取り組んだ事のひとつに、人的強化子の強化があげられる。スタッフとの適切なかかわりが増えたことで、Tさん自身の内面にもどのような変化が起きたかはわからないが、穏やかに過ごすことができる時間が増え、実際に好ましくない行動の減少にも繋がった。

タイマーで次の活動に移行することができない、倉庫での活動への移動の際に玄関で大声を出す、トイレの際必要以上にペーパーを要求する、などの好ましくない行動があったが、以前より確実に減少している。この取り組みだけが変化の要因ではないが、Tさんにとって人的強化子が強い動機づけになっていることがわかった。



スタッフと一緒に的あて
ゲームを楽しむ様子

5. 今後の課題と展望

今後のTさんの支援としては、リサイクル活動に力を入れたいと考えている。以前からペットボトルのラベルはがし、ペットボトル潰し、空き缶のプルタブ外しを作業に取り入れていたが、新しく分別作業にチャレンジしたいと考えている。近隣大学から回収し、ペットボトル・缶・ゴミに分別する作業だが、これならスタッフと一緒に取り組むことができる。最終目標は、回収→分別→洗浄→ラベルはがし・潰しと、一連の作業を任せられることができるよう支援することだ。Tさんに限らず、現状に満足することなく少しずつ活動の幅を広げていくことがあすくの課題だ。

支援者の課題としては、どの立場の支援者であっても利用者から見れば同じ役割であることを自覚し、全員が学ぶ意識を持って支援に取り組むべきであると、今回の施設コンサルテーション事業を通して改めて感じた。学びが不十分であるために、スタッフ間で支援の統一が難しい状況があったり、問題に気付くことができない状況を改善したい。

今後あすくが、利用者にとって楽しく居心地の良い環境であり続けること。また、支援者にとってはより良い支援を目指してPLAN-DO-SEEを繰り返し、切磋琢磨できる環境であることを目指します。ご指導いただきありがとうございました。 工房あすく 松井智佳

(2023年5月)

西寺育成苑 デイサービス（社会福祉法人京都育成の会）

〒601-8469 京都市南区唐橋平垣町 64-3

TEL 075-693-3300 FAX 075-693-3400

<https://kyoto-ikuseinokai.com>



◆ 実施コース **アセスメントコース**

◆ 実践報告

1. 事業所概要

サービスの種類：生活介護事業、計画相談

定員 20名	現員 23名	1日平均利用者数 15名
利用者平均年齢 40歳	障害支援区分平均 5.4	

コンサルティング参加職員：4名

2. ケースの概要及び相談内容（対象者について、事業所の課題、職員の困りごとなど）

対象者について

20代女性、ダウン症候群と自閉症の診断があり、障害支援区分は6。その他、多動、聴覚過敏などの特性があり、強度行動障害の状態でもある。パニック時は物を投げる、蹴る、人を叩く、噛むなどの他害行動も見られる。簡単な指示については口頭でされても動くことができ、日常生活動作はほぼ自立している。

支援学校を卒業してすぐに当事業所の利用を開始したが、まもなく室内外を走り回る、物を手当たり次第口に入れる、通りすがりに他利用者へ接触する、唾を吐くなど、ありとあらゆる試し行動が見られ、一瞬たりとも目が離せない状態だった。また、活動の切り替えが上手くできず、好きな活動は声をかけてもやめられない、終わるよう促したことでパニックになることもあった。そんな中、他利用者への他害行動が徐々に増えていった。

これらの様子を受け、マンツーマンでの対応を行っている。本人は「誰と」という情報を最も気にするため、誰と活動するのかを明確にしている。また、公園でブランコをすることを主な活動としていたが、公園に行くために自らきっかけを作って不穏になっている様子が出てきたため、公園に行くことをやめ、午前、昼食後、降苑前に自立課題を取り入れ、活動内容の統一を図っている。

職員の困りごと

①本人の職員に対するこだわりが強い

マンツーマン対応により、本人の職員に対するこだわりが強くなり、職員の使い分けが激しくなっている。態度や行動が相手によって大きく異なるため、支援の統一が図りにくい。特定の職員との関わりにも固執し、その職員を呼ぶために不穏になったり、その職員が関わっている他利用者に対して他害行動をする様子も見られる。

②気持ちを上手く切り替えられない

好きな活動をやめることができず、特定の職員の声かけでないと終われなかったり、終わるよう促すと納得できずパニックになることもある。また、気分が高揚している際に試し行動や注意獲得行動が多く見られるが、その状態から切り替えられず、職員が制止することで結果的に不穏になるというように悪循環な状態に陥っている。そして一旦不穏な状態になると切り替えに時間を要する。

③自立して過ごす時間がほとんどない

集中して取り組むことが少なく、終始動き回っているため、職員が常に後を追わないといけない状態である。不適切な行動が見られることも多く、結果として身体拘束や行動制限と捉えられかねない支援を行う場面が増えている。また、自立課題は比較的好んでいるようだが、余暇時間の過ごし方が見つからない。

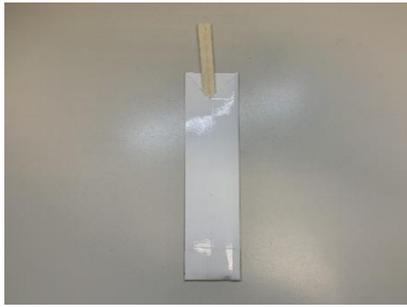
3. アセスメントから得られた情報と、それに基づく取り組み内容

アセスメントからわかったこと

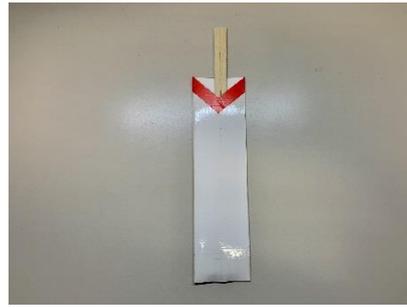
強み・得意なこと	弱み・苦手なこと
<ul style="list-style-type: none"> ・ 「できる」「わかる」と見通しが持てたことは、やり遂げたい気持ちが強い。 ・ 物の取り扱いが丁寧で、きっちり並べたり整えたりすることを好む。 ・ 実物や実演など視覚的に示すと理解しやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 見通しが持てない場面では物や人に注意が移りやすい。 ・ 口頭だけの指示は意図を理解するのが難しい。 ・ 困った時に援助を求められず、何とか応じようとした結果、直接行動に出やすい。また、本人が困っていることが、本人の表情や様子から捉えづらい。 ・ 1つの活動や作業を長時間続けることに苦手さがある。
感覚の特性など	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 耳から入る刺激に過敏に反応する。 ・ 不快な刺激が出ている場面で、自身が大声を出す、怒るなどの行動をとることで、その場から回避しようとする。 ・ 「感覚探究」傾向が非常に強く、心地よい、好きな感覚を求めて行動する傾向を併せ持っている。 	

アセスメントにもとづく取り組みの計画、具体的内容

- ①自立課題に集中して意欲的に取り組むことができる。
 - a) 自立課題の合間にトランポリン（感覚刺激が得られる活動）を取り入れる。
 - b) 自立課題の種類や量を見直す。



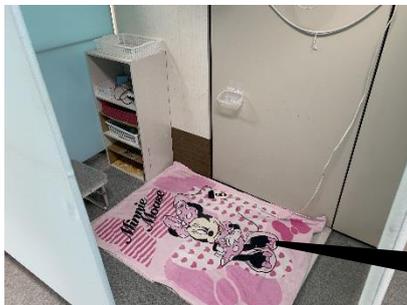
〈箸入れの課題〉



入口がわかりやすいように、縁に色をつけた。

②しんどい時に自ら休憩スペースに入ることができる。

しんどそうな様子が表情や態度からわかる時に、休憩スペースへ誘導する（「しんどくなったら休憩スペースに入ってよい」ということを覚えられるようにする）。



〈休憩スペース〉



マットを敷いて寝転べるようにし、本人が好む余暇アイテムを手に取りやすいところに置いた。

③気持ちを切り替えて活動を終わることができる。

タイマーを使用する。

4. どのような変化が生まれたか（事業所職員の理解・気づき、対象者の変化など）

自立課題に取り組む様子

トランポリンを跳ぶことで、感覚刺激が得られる粗大運動が切り替えにつながり、集中できるようになった。身体を動かさず、歩くことがリフレッシュになっていると思われる。また、色をわかりやすくしたり、量を調整したことで自立課題への拒否や離席が減少し、課題の内容が本人への負担となっていたことに気づいた。



〈トランポリン〉



〈課題中の様子〉

アセスメントの結果と普段本人のやっていることが乖離しているため、「できる人」と考えてしまっていたが、何となくできてしまっていること（やれてしまっていること）が本人の負担になっているのかもしれないというアドバイスを受け、プットイン課題など、簡単なものも用意し、達成感を味わえるよう工夫した。



〈プットイン課題〉

休憩スペースの活用

課題中やレクリエーション中に、周囲の音や声が辛くなった時や疲れた時などに休憩スペースに自ら向かう姿が見られた。また、サウンドブックを余暇アイテムに追加すると、苦手な音や声が聞こえた時の回避するための手段として活用できている場面もあった。

レクリエーションはペットボトルが倒れる音、皆の声、ボール…気になる音や物がたくさんあり、感覚探究傾向が強いために注目したくなる、しかし同時に苦手な刺激もたくさんあり避けたいというように、本人にとって難しい環境であるご意見をいただき、レクリエーション中に不穏になることが多い要因が理解できた。今では休憩スペースとレクリエーションの場を行き来しながら、穏やかに過ごすことができている。

気持ちの切り替えについて

給食までの待ち時間やサウンドブックを聴く時などにタイマーを使用した。タイマーが鳴ったら次の活動に移るようにすると、スムーズに切り替えて行動できた。サウンドブックは好きな活動であるためやめることが難しいのではと心配したが、タイマーが鳴ると声かけなくとも自ら片付けることができている。

また、個別の活動の終わりを示す合図を「活動をやりきったら終わり」から「タイマーが鳴ったら終わり」に変更するのもよいとアドバイスいただき、全体の活動時間に合わせて個別の課題を途中で切り上げる場合に、タイマーで終了を示すと本人もすっきり終えることができた。

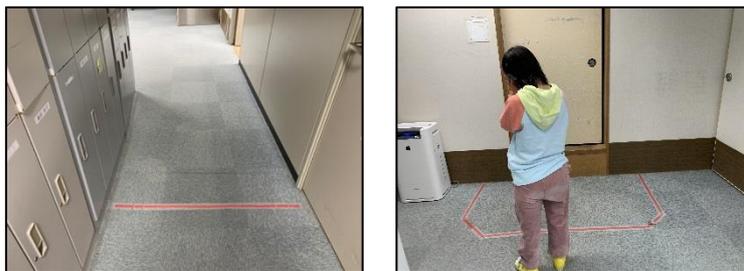
5. 職員の気づきおよび今後の展望

今回コンサルテーション事業を利用し、対象者に関する理解を深めたり環境の見直しをすることができた。これまで対象者がふざけたり不穏になったりするのは注意獲得行動であり、職員の使い分けにより見られていると考えていた。しかし、「表情からは意思は読み取りにくく、注意引きと捉えられがちだがそうではない」とご意見をいただき、狭い視野でしか本人を捉えられていなかったということに気づいた。行動記録の取り方も教えていただいたことで、本人の言動は何が要因で表れているのかということを様々な視点から考えられるようになった。

今後は、本人がやりたいこと・欲しいものを選択できたり、困っている時に援助を求めたり、本人と職員が円滑なやり取りができたらと思う。大声を出す、他害行動に出るのではなく、適切な方法での意思表示を支援していきたい。また、今は本人の生活の安定を優先するため他利用者が本人に合わせて活動している状態だが、少しずつ活動の幅を広げ、他利用者と一緒に行動できるよう支援を組み立てていきたい。

さらに、今回学んだことを他利用者にも生かしていきたい。コンサルテーション事業を利用したことで、対象者の支援についてはもちろんだが、それ以上に職員の自閉症支援に対する知識や技術の向上につながった。自閉症の特性や行動の見方など新たな学びが多くあり、「この人の行動にはどんな意味があるのか」「こんな支援を試してみたい」と各職員が支援について前向きに考えるきっかけになった。職員間で情報を共有したり意見を交換する場面が増え、チームとして支援していこうという雰囲気にも変化したと感じる。PLAN-DO-SEE を実践し、利用者それぞれの生活がより良いものとなるよう今後も努めていきたいと思う。

（2023年6月）



〈②エリア分け〉

3. どのような変化が生まれたか（事業所職員の理解・気づき、対象者の変化など）

「大きな声を出す」という行動について

行動記録を取ってみたが、結果的には大きな声を出す明確な理由はわからなかった。しかし、大きな声を出す行動が見られるようになってから、突発的に物を投げたり人を叩いたりすることが減った。

これまでイライラしたり不快なことがあった際に物を投げる、他害行動をするという行動をとっていたが、「大きな声を出す」という表現手段を獲得したと思われることがわかった。

しんどいけれどギリギリまで頑張ってしまう、気持ちがついて行ってないけれどやろうとしてしまうというのが本人の特性であり、限界に達した時に直接行動に出やすい。声を出すことは疲れた時やしんどい時等のサインなのかもしれないということに気付くことができた。

他利用者との関わりについて

人に自分の物を差し出して故意に取り合いになるようにしたり、相手が嫌な気持ちになり反応してしまうような発言を近づいて言ったりする行動について、相手の反応を楽しみ刺激として取り込んでいるとアドバイスをいただいた。本人は刺激に対して感覚探究の傾向にあり、活動に飽きてくると、面白いことを自ら見つけたり作り出したりするため、それらのやり取りを面白いと感じていると思われる。

本人の視界に入ることによって刺激になるため、各自の行動範囲をエリア分けする等お互いに刺激とならないような環境作りが必要とのことで、サウンドブックを使用する範囲を示したり、部屋の扉を閉めたりすることは有効であった。しかし、その他の場面での接点が多く、完全な課題解決には至っていない。

4. 今後の課題と展望

今回フォローアップを受けて、やはり本人の意思表示の支援が課題であると感じた。表出することが苦手であり、しんどいけれど伝えられず溜め込んでしまうことで、声を出したり物を投げたりするという行動に表れる。拒否することや「手伝って」「休憩したい」と伝えられるようになってほしい。

また、本人含む全体の活動内容の見直しが必要と考える。本人が他利用者との不適切な関わり方を面白いと感じているのであれば、そちらに行くよりも楽しい、興味をそそるような活動を提供していきたい。最近では、少しずつ本人の活動の幅を広げ、カラオケやドライブ等新たな活動を取り入れている。さらには、利用者ごとの活動時間をずらし、相性が合わない方同士の接点を減らす工夫をしている。それにより、本人が大きな声を出すことが減り、穏やかな様子で過ごせる日が増えている。活動のマナー化や他利用者との関わりが上手いいかないことが、本人のストレスになっていたのかもしれない。

令和4（2022）年度 施設コンサルテーション事業 実施報告書

コンサルテーション事業を利用し始めてからの約1年半で、何よりも行動観察がとても大切だということ学んだ。行動1つひとつを観察し、その行動をとる理由を見つけようとする姿勢を、各職員が身につけることができた。今後も行動観察を大切に、チームで自閉症支援に取り組んでいきたいと思う。

（2023年12月）